

いぶき 18号 平成24年7月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第17回：エドウィン・アーノルド（1832～1904年）



「その景色は妖精のように優美で、その美術は絶妙であり、その神のようにやさしい性質はさらに美しく、その魅力的な態度、その礼儀正しさは、謙譲ではあるが卑屈に墮することなく、精巧であるが飾ることもない。これこそ日本を、人生を生甲斐あらしめるほとんどすべてのことにおいて、あらゆる他国より一段と高い地位に置くものである。」

（渡辺京二著『逝きし世の面影』平凡社ライブラリー）

英国の詩人でジャーナリストのエドウィン・アーノルドは、インドのデカン大学で学長を務めた後、デーリーテレグラフ紙の編集長となり、1889年（明治22年）に来日しました。この時、歓迎晩餐会で述べたスピーチが上記のもので、アーノルドは日本を「地上で天国（paradise）あるいは極楽（lotusland）にもっとも近づいている国だ」と賞讃しています。

また、彼の著した『ヤポニカ（Japonica）』には、「よき立ち振る舞いを愛するものにとって、この“日出る国”ほど、安らぎに満ち、命をよみがえらせてくれ、古風な優雅があふれ、和やかで美しい礼儀が守られている国は、どこにもほかにありはしないのだ。」と記されており、貧しくてもすばらしい道徳・礼節を備えている日本の人々を絶賛しています。さらに、日本の子供たちについても「優しく控え目な振舞いといい、品のいい広い袖とひらひらする着物といい、見るものを魅了する。手足は長いし、黒い眼はビーズ玉のよう。そしてその眼で物怖じも羞かみもせずあなたをじっと見つめるのだ。」と述べています。（M. I）